大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

日記のなかのウィリアム・バード：ウェストーヴァーにおける規律と秩序

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 滝野, 哲郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011049

日記のなかのウィリアム・バード
―ウェストーヴァーにおける規律と秩序―

滝　野　哲　郎

18世紀ヴァージニア植民地の代表的プランターの一人であったウィリアム・バード（William Byrd II, 1674-1744）は、秘かに日記をつけていた。人の目に触れることのないように細心の注意を払い、小さな手帳に日々の出来事を記していたバードは、速記を使用していた。時間の節約のためでもあろうが、彼にとって速記はむしろ「暗号」の役割を果たしていた。妻や使用人といった身の回りのものたちに読まれることを極力避けたいと考えたのであろう。[1]

バードの日記の存在が確認されたのは、1930年代後半になってからである。ノースカロライナ大学、カリフォルニア州のハンティントン図書館、およびヴァージニア歴史協会に眠っていた文書が次々とバードの日記であることが明らかになり、彼の「暗号」が読み解かれ、そして出版された。これまでに見つかったのは、1709年から1712年、1717年から1721年、そして1739年から1741年の三つの時期にあたる部分である。[2] まだ発見されていない1712年から17年、1721年から39年の期間についても日記をつけていたと考えられ、そうであれば、最初の1709年はバードが34歳のときであり、最後の1741年が67歳のときであるから、ほぼ人生半ばから晩年近くまで日記を書き続けていたことになる。[3]

では、バードが実際に日記を書き始めた時期はいつなのか。それを知る手がかりを、使われていた速記法に求めることができる。日記は、ウィリアム・メーソン(William Mason)が考案した速記法、それも1707年に出版された改訂版に基づいている。[4] バードがこの書物を手にしたのは、最も早くて1707年ということになるが、当時の大西洋を渡る船便に要する日数を考えれば、

『女子大文学　英語学英米文学篇』（大阪女子大学紀要）第2号、2001年3月

それよりもさらに後のことになる。したがって、1709年に始まる部分は、かなり初期のものであることは確かであり、また最初の部分である可能性も高い。

日記を始めたと考えられる1707年から1709年の時期は、バードが長年のイギリス滞在から帰国し、ヴァージニアのプランターとして暮らし始めて数年経過した頃である。この小論では、1709年からの日記を取り上げ、当時、バードが彼のプランテーションであるウェストーヴァー(Westover)でどのような生活を送り、彼にとって日記がどのような意味をもっていたかについて考えてみたい。

I

バードがヴァージニアに戻ったのは1705年、31歳のときである。彼は人生の22年間をイギリスで過ごしてきた。生まれ育ったヴァージニアを離れたのは7歳のときで、教育を受けるために母方の祖父母のいるイギリスのエセックスに送られたのである。やがて、フェルステッド(Felsted)・グラマースクールに入学した彼は、優秀な教師クリストファー・グラスコック(Christopher Glasscock)の指導のもと、ギリシア語、ラテン語、ヘブライ語をはじめ、古典を中心に幅広く教養を身につけ、イギリスのジェントルマンたるにふさわしい基礎を築いていくことになる。

卒業後、一時期オランダで経営について学んだのち、18歳で、イギリスの四法学院の一つ、ミドルテンプル法学院に入り、3年後には弁護士の資格を取得する。当時、この法学院には、多くの知識人や文人が所属していたので、バードは彼らからいろいろと刺激を受け、彼の知的関心は、法律からさらに多方面へと広がっていく。この頃、ロンドンの劇場に通い、観劇を楽しむようになったのは、一つ上の学年にウィリアム・コングリーブ(William Congreve)やニコラス・ロウ(Nicholas Rowe)といった劇作家がいたことや、ウィリアム・ウィッチャリー(William Wycherley)と親しくなったことが影響しているのであろう。また、ロバート・サウスウェル卿(Sir Robert Southwell)を通して、知識階級や上流階級との交際が広がり、22歳の若さで王立協会

(Royal Society)の会員に選出されたのも会長職にあったサウスウェルの推薦があったからである。科学についても深い関心を示すようになったバードは、1698年には王立協会で論文を発表している。[5]彼にとって、この時期のロンドンでの生活は、知的刺激に満ち、社交を楽しむといった、まさにイギリスのジェントルマンの暮らしそのものであった。

1705年、このようなイギリスの生活を離れることになるが、それは前年に死去した父親ウィリアム・バード一世の遺産を受け継ぎ、ウェストーヴァーの主人として暮らすことになったからである。ウェストーヴァーは、ヴァージニア植民地の首都ウィリアムズバーグからおよそ30マイル離れた、ジェームズ川沿いにあるプランテーションである。その4,700エーカーほどの土地には、屋敷、船着場、奴隷小屋、庭園、牧草地、小麦やトウモロコシの畑、そしてこのプランテーションの経済的基盤となるタバコ栽培の畑があり、自給自足できる小さな自立した世界であった。このウェストーヴァー以外にも、バードは、ジェームズ川上流にあるプランテーションやリッチモンド周辺の未開墾の土地などすべてを合わせると26,000エーカーという広大な土地、そしてそこで働く多くの奴隷を所有することになったのである。こうしてロンドンから大西洋を隔てたヴァージニアというまったく異なった環境のなかで、プランターとしての暮らしが始まることになる。

1709年2月6日、帰国からおよそ3年半経過したこの日から日記はバードの生活の様子を伝え始める。彼は日記になにを記しているのだろうか。比較的短い2月8日のところを見てみよう。

> 今朝は5時に起床、ヘブライ語を一章とホメロスのオデュッセイアを読む。朝食に牛乳を飲む。祈る。ジェニーとユージーンが鞭を打たれる。体操をする。午前は法律書、午後はイタリア語の本を読む。堅いチキンの食事。アポマトックスより豚肉を積んだ船が到着。夕方、プランテーションを歩いてまわる。祈る。今日は、頭も冴え、からだの調子も良く、気分も良かった。全能の神に感謝。

それからほぼ1年後の2月2日は次のように記される。

7時に起床、ヘブライ語とカッシウスをギリシア語で読む。祈りをして、朝食に牛乳を飲む。バニスターに病気の義父に会いに行く許可を与え、薬を持たせる。とても暖かい日。プランテーションを歩いてまわる。食事は煮た牛肉。煮込んだチェリーのことで妻と口論になる。午後、ラテン語を読む。それからまたプランテーションを歩いてまわり、奴隷たちの様子をみる。夜、牛乳を飲み、ラテン語の続きを読む。祈る。からだの調子も良く、頭も冴え、気分も良かった。全能の神に感謝。[6]

1年を隔てて両日ともあまり変化のない平穏な日で、そこには、起床の時刻、読書の内容、食事のメニュー、プランテーションの状態、奴隷と家族の様子、祈りと神への感謝というような日常的な事柄が記されている。もちろん、他の日には、外出や客の訪問などの出来事の記載もみられる。たとえば、政治の用件でウィリアムバーグへ出かけたとき、ヴァージニア西部に所有する土地を見に行ったとき、友人知人宅を訪問したとき、あるいは訪問客がウェストーヴァーに滞在したときのことなどである。[7] しかし、外部との接触のない日には、バードはウェストーヴァーの世界の中で暮らし、とりわけ、書斎での読書、プランターとしての仕事、家族との関係に時間の多くを費やしている。

II

バードは、朝起きると、ほぼ毎日「ヘブライ語とギリシア語を読む」。ヘブライ語で読むのは聖書であり、ギリシア語ではホメロス、ルキアノス、プルタルコスなどのギリシア古典である。彼にとって、グラマースクールで身につけた古典語の読解力を高めるとともに、その内容について熟考することが朝一番の日課として大切なことであったにちがいない。

バードは、一日に何度も読書をする。ヘブライ語とギリシア語で始まる早朝がおわると、昼間に一、二度、そして夜にもう一度、本を読むことが多い。

そして、二回目以降、彼の読む言語とジャンルは広がりをみせる。日記には、カッシウス、テレンティウス、ホラティウスなどのラテン語の作品、そしてフランス語、イタリア語、オランダ語による書物を読んだことが記されており、いかに多くのヨーロッパの言語に精通していたかがわかる。もちろん、ミルトンやドライデンなどの文学作品や、法律、医学、薬学、植物学などさまざまなジャンルの英語による書物も読み、その関心の幅の広さは、当時のイギリスの知識人と相似たものがあった。[8]

バードは、読書のために、長い時間を書斎で過ごした。書斎には、イギリスをはじめヨーロッパ各国から取り寄せられた書物が詰まっていた。バードは、植民地時代のアメリカではコトン・マザー(Cotton Mather)と並ぶ蔵書家として知られているが、のちに記録された所蔵書のリストによると、歴史、旅行記、航海記、法律、医学、文学、芸術、神学、古典、博物学など、多岐にわたるジャンルの書籍を収集していたことがわかる。[9] なかには、彼のロンドン時代の生活を思い起こさせるものも多い。楽しかった観劇の思い出もあったのか、シェイクスピアをはじめ数多くの劇作品が収められ、また王立協会の会員であることをいまだに誇りとしていたのであろう、会報が50年間分も書架に並べられていた。このような多種多様な書物の収集によって増加し続ける蔵書を収めるため、屋敷を改築して、手狭になった書斎を広くしたほどであった。「午後はほとんどずっと、本の片づけをしていた」こともあるなど、書物の整理にはかなりの時間を要していたようである。[10]

書斎で一人で過ごす時間は、バードにとって非常に貴重なものであった。「書斎に鍵を取り付け」、毎日そこに籠る。[11] 妻がなかに入ってくることさえ快く思わない。この閉じられた部屋のなかで、バードは気に入った蔵書に囲まれ、ロンドンの生活に思いを馳せ、本を手に取ってページをめくり、知性と教養の世界に浸っていたのである。たとえヨーロッパから遠く離れた辺境での暮らしであれ、この書斎は、バードにとって、イギリスの英知が再現された空間であったといえよう。

バードが頻繁に書斎に籠って読書に励むのは、グラマースクール以来のこの習慣を守ることによって、知性豊かな生活をけっして崩したくないと考えたからである。読書の軌跡を丹念に日記に記そうとしたのも、ジェントルマ

ンとして知的生活における規律を維持しようとしたバードの強い気持ちの表れとみることができるであろう。

III

バードは、よく「プランテーションを歩いてまわる」。外出した日や雨の日をのぞけば、ほとんど毎日ように、夕方、プランテーションへと向かう。ときには、妻や訪れてきた友人とともにいくこともあり、会話を楽しみながら散策する。歩くとおもしろいことにもでくわす。ある冬の日、風が強く、とても寒かったが、途中で「氷の上を滑ってみた」こと、そしてその翌日にも、「氷が解け始めていたが、スケートで滑った」こともあった。[12]

バードがプランテーションを「歩いてまわる」主な目的は、自分の所有する奴隷、家畜、作物の状態をみることにあった。「すべてのことが順調にいっていることがわかった」のであれば良いのだが、いつもそうとは限らない。「タバコ畑に雑草が生えているのを見つけた」り、「タバコを乾燥させる小屋に行ったとき、出来の良くないタバコがあった」りした。家畜の中でも、牛のいるところにはよく立ち寄って「搾り立ての牛乳を飲んだ」。また、仕事の進み具合を入念に監視すると同時に、ときには自ら「桃の木の枝を切った」り、「奴隷とともに、木の植えかえにいった」こともあった。[13]

バードは、およそ220人の奴隷を所有していた。その管理を監督人にすべて任せるのではなく、自ら奴隷の様子を見てまわり、その世話をする。こうしたことは、奴隷たちに、主人の存在を、肌で伝えることにもなったはずである。たしかにバードにはいろいろなことが見えてくる。「女の奴隷がりんごを数個盗んで隠しているのを見つけた」こと、「野豚を追いかけ、足首をくじいた奴隷のジョン」のこと、「女の奴隷が縛っておいたのに、再び逃亡した」ことなどである。屋敷のなかでも彼の目は奴隷の仕事や行動に向けられる。食事をつくった奴隷が「ベーコンを十分に煮なかった」ことや、「ダニエルと乳母との密通を白状しなければ鞭を打つぞ、とアナカを脅したら、彼女はそれを認めて鞭打ちを免れた」が、「このことで乳母を厳しく叱りつけると、彼女

は生意気にもこれを否定した」こともあった。バードは、当時の奴隷所有者としては寛容な方であったが、規律を守らなかったり服従しない奴隷には自ら鞭を打つこともあった。[14]

バードは、よく病気の奴隷の世話もした。医学と薬学に興味をもっていたバードは、嘔吐、下痢、瀉血といった処置によって、自ら病気の治療にあたっている。彼が「病気の奴隷たちにできるかぎりの看病をした」記述が頻繁に出てくる。近隣で病気が流行りだした冬には、「悪くならないように6人に吐き薬を与える」と、「吐き薬はとてもよく効いた」ので、それからの一週間、バードは次々と吐き薬を処方し続けている。実際の効果のほどは疑わしいが、いずれにしても、バードは自分のとった処置には満足している様子である。[15]

ヴァージニアのプランテーションを経営するバードにとって奴隷は大切な財産であった。彼が自ら奴隷たちを見てまわり、看病や治療をするのは、タバコ栽培のプランテーションにおいて奴隷が必要不可欠な労働力であったからに他ならない。そして、彼らを監視することで、プランテーション内のさまざまな仕事が順調に進み、収益につながることにもなった。彼は、プランターとして、作物、家畜、奴隷の世話をし、管理することに慣れ、充実感さえ覚えるようになっていたのではないだろうか。

イギリスでは優雅な社交生活を楽しんでいたバードであったが、日記には、ジェントルマンとしての生活を維持する一方、ヴァージニアのプランターとしての仕事に専念する彼の姿が現れる。読書によって規律ある生活を目指したように、彼は、自ら奴隷たちを見てまわり、ウェストーヴァーの主人としての権威を彼らに知らしめることによって、彼らを支配し、秩序あるプランテーションを築こうとしていたといえるであろう。

IV

ヴァージニアに戻ったバードはまだ独身であったが、財産と地位を受け継ぎ、結婚のための条件は整っていた。まもなく、18歳のルーシー・パーク(Lucy Parke)との交際が始まる。[16] 彼女の父親ダニエル・パーク(Daniel Parke)は

ウィリアムズバーグの近くのプランターで、植民地議会議員と参議会の一員であり、西インド諸島のイギリス領植民地リーワード諸島の総督にも任命されていたほどの人物であった。バードは、パークの財産と政治的地位に関心を持ちつつ、彼女自身の魅力にも惹かれて、出会った翌年には結婚している。[17]

日記には、二人がよくトランプをしたり、連れだって庭園やプランテーションを散策して過ごしていることが記されている。ときには「妻のためにきじを捕まえようとしたが、失敗した」ことや、「妊娠しているのに妻が庭の柵を乗り越えようとしたので怒った」こともあった。[18]

二人の結婚生活は、けっして平穏といえるものではなかった。父親ダニエルに似た気性の激しさからか、ルーシーはすぐに機嫌を損ねて怒り出すと日記には記される。「妻とトランプをしていて、ずるいことをしたら、妻が怒りだした」のは仕方がないが、「トランプをしていて、口論となり、妻が泣きだした」ことはよくあった。13歳も年齢が離れているので、おとなしく、自分の思いどおりになると考えていたのであろうが、ルーシーは彼の言葉にしばしば反発する。バードもそれに反論し、喧嘩を始めることになるのだが、自分が冷静さを保ち、妻の興奮した感情を押さえるべきだとも考えるのである。「女性の感情というものは、ときには、過度にならないよう押しとどめることが必要である」と彼はのちに書簡に記している。[19]

日記には、バードが生活面のすべてにわたって、しばしば家事、育児、服装、化粧など、妻の領域と考えられる事柄にまで、口うるさく干渉する場面が現れる。「古い牛肉から使わずに、新しい牛肉を先に食事に出したので妻を叱る」と、妻が怒り、彼も不機嫌になる。妻の注文した品物が船便で届いたとき、それが高価なものであったのでバードは非常に機嫌が悪くなることもあった。二人そろってウィリアムバーグに出かけようとするが、彼女の眉毛のことで喧嘩になり、彼女はすべてきれいに抜かなければ家を出ないと言い張る。「しかし、私はそれを退け、彼女を説得して、私の権威を維持した」のである。また、自分だけの世界である書斎に彼女が入ることを許さなかったり、「書斎の本を彼女に貸さなかった」のも、自分の優位な立場を保つためであったのかもしれない。[20]

バードは、女性は男性よりも劣るという当時の社会通念から、妻が夫に服

従するのは当然であると考えていた。一方、結婚生活において夫婦間の親密さを求めていたルーシーは、服従を強いられると、それに強く反発した。[21] しかし、バードにとっては、いかに反発されようとも、妻の様子や行動を把握し、あるいは監視することが、彼女を支配するうえで必要なことであった。つねに優位に立つことで、夫としての権威、そしてウェストーヴァーの主人としての権威を維持し、結果として家庭の秩序を保つことにもなると考えていたのであろう。

V

長年住み慣れたロンドンを離れ、ヴァージニアでプランターとして暮らし始めることになったとき、バードの心境は複雑であったにちがいない。都会の生活に慣れ親しみ、イギリスのジェントルマンであることを誇りとしてきたバードにとって、帰国は、これまで築いてきた知的環境、娯楽、交友関係などすべての活動の場を失うことである。以前、このままロンドンでの暮らしを続けたいと考えた時期もあった。また、イギリスで上流階級の女性との結婚を望んだのも、婚姻関係によってより裕福で優雅なジェントルマンとしての生活を求める気持ちから生じたのであろうが、これももはや帰国によって不可能となってしまう。

バードがイギリスのジェントルマンであろうと強く意識したのは、彼が生粋のイギリスのジェントルマンではないことの裏返しなのかもしれない。たとえ、7歳からイギリスで暮らし、ジェントルマンの教育を受け、ミドルテンプル法学院で学び、父親が広大な土地と財産を所有していたとしても、所詮彼は、ヴァージニア植民地生まれのジェントルマンであった。上流階級の女性との結婚が実らなかった一因もそこにあったのかもしれない。イギリスに滞在中、すでにバードのなかには、ジェントルマンであるという誇りとともに、ウェストーヴァーこそが自分の故郷であり、生活の場であるという意識がしだいに確かなものになっていたのではないだろうか。

帰国の頃には、バードは、自分がイギリスに送られた理由、そして自分が

長男であり、後継者であること、そしてヴァージニアにおける自分の役割を十分に納得していたのであろう、父親の訃報を受け取ると、ただちに帰国の準備に取りかかり、急いでウェストーヴァーに戻っている。父は遺言で、財産と土地のほとんどすべてを息子に相続させていた。それから4年あまり、墓地の改修の際、バードは父の墓を開かせている。「父を見るため」であったが、「腐食が激しく、まったくその面影は見いだせなかった」。[22] 生前、父と語る機会がほとんどなかったバードであったが、日記を書き始める頃には、父の望んでいた通り、遺産を守り、引き継いだ仕事を着実に遂行しているのであった。

ヴァージニアでの生活は、都会の華やかな生活と比べれば単調なもので、プランテーションの管理や経営といった仕事は時間と労力を要するものであった。しかし、彼はそういった環境に彼なりに順応しようとした。プランターとなったバードは、自らの手で規律正しく管理されたプランテーションの世界をつくりあげようとしていた。バードはのちに、自らを「家父長」にたとえている。自分の家族だけでなく、所有する「家畜と奴隷」を含めた「大きな家族」の世話をしなくてはならない。「すべてのものが決められた仕事をするように、万事が順調に進むように、注意を払わなくてはならない」のである。そして、こうしたことが、ヴァージニアという「静寂の地」では「楽しみ」ともなるという。[23] 日記が描く1710年前後のバードは、ロンドンの生活にまだ未練を残しながら、自分の置かれた境遇に「楽しみ」を見い出そうとする過程にあったといえるだろう。

「大きな家族」の頂点にたち、秩序あるプランテーションを目指したバードは、自らの生活にも規律を与えようとした。ジェントルマンであることを誇りとし、自らの知性を保ち、さらに磨きをかけるため、毎日かなりの時間を書斎での読書に費やした。そして、日々の出来事を丹念に記録することで、規律正しいジェントルマンの生活を追求する自分自身を見つめていたのである。バードがヴァージニアに戻って日記を始めたのは、自分がジェントルマンであり続けることを書き留め、「静寂の地」にいるプランターとしての自己の存在意義を確認しようとする表れであったといえる。この日記は、ヴァージニアのジェントルマン・プランターとして、ウェストーヴァー、そして自

分自身のなかに秩序ある世界を築いていこうとするバードの姿勢を鮮明に映し出しているといえる。

注

1 バードの伝記的事実については、Pierre Marambaud, *William Byrd of Westover, 1674-1744* (Charlottesville: Univ. Press of Virginia, 1971); Kenneth A. Lockridge, *The Diary, and Life, of William Byrd II of Virginia, 1674-1744* (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1987)を参照。

2 Louis B. Wright and Marion Tinling, eds., *The Secret Diary of William Byrd of Westover, 1709-1712* (Richmond, Va.: Dietz Press, 1941); Maude H. Woodfin and Marion Tinling, eds., *Another Secret Diary of William Byrd of Westover, 1739-1741* (Richmond, Va.: Dietz Press, 1942); Louis B. Wright and Marion Tinling, eds., *The London Diary (1717-1721) and Other Writings, of William Byrd of Virginia* (New York: Oxford Univ. Press, 1958). 最初の1709年に始まる部分では、妻と幼い子供と暮らす30歳代半ば、次の1717年からの部分では、妻を亡くしロンドンで自由奔放に暮らしたのち帰国した40歳代半ば、最後の部分では二人目の妻とその子供たちとともに余生を送る60歳代中頃のバードが登場する。

3 これ以前のバードは、旅などに出かけたときにその記録を残すことはあったが、日常的に日記をつけることはなかったと考えられる。Marambaud, 106-16; Lockridge, 39-43.

4 William Mason, *La Plume Volante; or the Art of Shorthand Improved; Being the Most Swift, Regular, and Easy Method of Shorthand Writing Yet Extant. Composed After 40 Years Practice and Improvement of the Said Art, by the Observation of Other Methods and the Intense Study of It.* 1707年に出版されたものは第三版である。初版は1672年に、第二版は1682年に出版されていたが、バードがメーソンの速記を初めて習得したのは、第三版からであると考えられる。この速記法は、バードにとって「暗号」の役割を果たすことにもなったが、元来、暗号として利用されるためのものではなかった。Lockridge, 42; Douglas Anderson, "Plotting William Byrd," *William and Mary Quarterly* 56 (1999): 710.

5 "An Account of a Negro Boy That Is Dappled in Several Places on His Body

with White Spots" が王立協会の会報 *Philosophical Transactions* に掲載された。

6 *Secret Diary*, 1-2 (8 Feb. 1709), 137 (2 Feb. 1710).

7 バードは、植民地の政治に関わるようになっていた。植民地議会(House of Burgesses)の代議員にはすでに選出されていたが、帰国後、父親の役職であった植民地収入役(receiver general)を受け継ぎ、さらに参議会(Council)の一員にもなった。バードの政治との関わりについては、Marambaud, 205-27を参照。

8 Kevin J. Hayes, *The Library of William Byrd of Westover* (Madison: Madison House, 1997), 35-72; Michal J. Rozbicki, *The Complete Colonial Gentleman: Cultural Legitimacy in Plantation America* (Charlottesville: Univ. Press of Virginia, 1998), 166-67.

9 バードの死から数年後、印刷・製本業者ジョン・ストレッチ(John Stretch)が書斎を訪れて、所蔵書の目録を作成している。そこには2,345の表題が記録されているが、一つの表題のなかには数十巻に及ぶものもある。ヘイズによると、バードの蔵書は、当時のアメリカでは、もっとも充実した個人によるコレクションであった。Hayes, ix-xv; Richard Beale Davis, *Intellectual Life in the Colonial South, 1585-1763* (Knoxville: Univ. of Tennessee Press, 1978), 2: 555-58.

10 *Secret Diary*, 70 (13 Aug. 1709).

11 *Secret Diary*, 133 (23 Jan. 1710).

12 *Secret Diary*, 123 (28 Dec. 1709), 124 (29 Dec. 1709).

13 *Secret Diary*, 119 (16 Dec. 1709), 545 (17 June 1712), 42 (1 June 1709), 544 (13 June 1712), 550 (28 June 1712), 286 (13 Jan. 1711).

14 *Secret Diary*, 544 (17 June 1712), 73 (21 Aug. 1709), 203 (8 July 1710), 316 (20 March 1711), 7 (22 Feb. 1709). Lockridge, 68-69.

15 *Secret Diary*, 281 (1 Jan. 1711), 126 (3 Jan. 1710).

16 バードとルーシーとの関係については、Michael Zuckerman, "William Byrd's Family," *Perspectives in American History* 12 (1979): 253-311; Paula A. Treckel, "'The Empire of My Heart': The Marriage of William Byrd II and Lucy Parke Byrd," *Virginia Magazine of History and Biography* 125 (1997): 125-66を参照。

17 義父パークは、6年後、リーワード諸島の争乱で殺害され、バードは残された土地とともに思いも寄らなかった借金も相続することとなる。William Byrd II to Seignor Fanforoni [Daniel Parke], *The Correspondence of the Three William Byrds of Westover, Virginia, 1684-1776*, ed. Marion Tinling (Charlottesville:

Univ. Press of Virginia, 1977), 1: 256-57.

18 *Secret Diary*, 128 (10 Jan. 1710), 38 (21 May 1709).

19 *Secret Diary*, 75 (27 Aug. 1709), 135 (28 Jan. 1710). William Byrd II to Mrs. Ann Taylor Otway, 30 June 1736, *Correspondence*, 2: 483.

20 *Secret Diary*, 18 (7 April 1709), 296 (5 Feb. 1711), 461 (30 Dec. 1711).

21 Treckel, 136; Kathleen M. Brown, *Good Wives, Nasty Wenches, and Anxious Patriarchs: Gender, Race, and Power in Colonial Virginia* (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1996), 319-21; Richard Godbeer, "William Byrd's 'Flourish': The Sexual Cosmos of a Southern Planter," in *Sex and Sexuality in Early America*, ed. Merril D. Smith (New York: New York Univ. Press, 1998), 148-53.

22 *Secret Diary*, 133 (24 Jan. 1710). Lockridge, 39-52.

23 William Byrd II to Charles Boyle, Earl of Orrery, 5 July 1726, *Correspondence*, 1: 355.